

# 『現代社会』における平和教育の実践

都 築 亨 原 幸 宏

## 1. はじめに

高等学校社会科の一科目として設置された『現代社会』は、発足後すでに3年を経過した。この科目は、必修科目として標準4単位で第1学年において履習・修得するものとして位置づけられたことは周知のとおりである。しかし、科目の内容構成から指導に当たる教師の側では、担当複数制の採用、大学進学を目指す生徒への進路指導、一方、生徒の側では、大学共通一次試験対策や対応に苦慮するなど、予期せぬ問題点が派生してきたことも事実である。こうした諸問題を内在しつつも、生徒にとっては学習指導が一過性としての側面もあるために、おろそかにできるものではない。

本論では、『現代社会』における学習項目の内容のうち、“核兵器と軍縮問題”を取り上げ、教師の複数制を採用して学習形態を校外学習におき、国際平和年である1986年の3月8日に「原爆の図」展を通して学習を深めた実践例を報告し、今後の学習指導の在り方や方法論の検討材料にしたい。

## 2. 「原爆の図」展を核にした学習過程

学習の目的意識と内容の深化をはかるため、事前指導に1時間を配当し、学年合同で以下に示す資料を中心に学習をすすめた。

【資料】「原爆の図」は、丸木位里・俊夫妻が、原爆投下直後の郷里・広島で、残留放射能を浴びながら、被爆者の救出にあたったときの体験をもとに、1949年から30年余りの長い歳月をかけて描いた15部作である。それらは、「幽霊」「火」「水」「虹」「少年少女」「原子野」「竹やぶ」「救出」「焼津」「署名」「母子像」「とうろう流し」「米兵捕虜の死」「からす」「長崎」である。いずれの絵も、ふすま8枚 大の大作である。

描かれているのは人であり、故なく人間の尊厳を奪われた人の群れである。ぼろぎれのようにたれ下がった皮膚をひきずって、よろめき歩く裸体の群れである。焼けて、むけて、ただれた体で、ふくらんだおなかだけが白い妊婦。幾重にも折り重なった死体の間から伸びるまだ生きている女の細い腕……。大きな絵の部分部分をじっと見ていくと、突然「ワッ」とわめきたくなる。

だが、単なるむごさだけが描かれているのではない。

むしろ描かれているのは悲哀である。例えば「母子像」には次のような壁書が付けられている。「家の下敷となり、燃えさかる中を、親は子を捨て、子は親を捨て、夫は妻を捨てて逃げまどわねばなりません。それがほんとうの原爆の時の姿なのです。だが、そうした中で不思議な事に母親が子どもをしっかり抱いて、母は死んでいるのに子どもが生きているという、そんな姿をたくさん見ました」

生あるもの、命あるもの、人間そのものに対する深いとおしみと、それを極限まで破壊する戦争へののろい、それが「原爆の図」である。かくまでに人間の尊厳を侵すものへの怒りでもある。

(野間美喜子「中日新聞1985年11月29日」による)

「原爆の図」愛知展の会場が県美術館であるため、別に3月8日(土)を校外学習の日を設定した意義、鑑賞する前の1時間、愛知展事務局長・野間美喜子氏の講演を聞く際、その要旨をメモするなどの留意点、鑑賞する「原爆の図」に付けられている解説文の要旨をメモし、レポート作成の素材にすることなど、学習を深めるための手法を示唆した。

レポートは、400字詰原稿用紙4枚以上に自分の考え、感想を整理した内容を記述し、作成期間も1週間にした。

## 3. 生徒の反応とその特徴

「昭和61年3月私たちは、原爆の図展を見に行きました。見る前に私たちは、大先輩の野間さんにお話しをうかがいました。野間さんのお話しは私にとってたいへんためになりました。野間さんは幼稚園のころ戦争を体験していて、津に疎開し、よく遊んでくれた靴屋のおじさんが、負傷している外人兵を棒でたたき出したのを見たそうです。それ以来、野間さんには一つの疑問がいつも心に存在していたそうです。なぜ、優しいおじさんが、鬼のようになって外人兵をたたいたんでしょうか。戦争で敵国の人間だからといって、そんな非人間的な行為をするなんて野間さんの純粋な心は、たいそう傷ついたことでしょう。それから野間さんは、丸木夫妻や原爆について話されました。」(棚沢)

「自分が幼い時、飛行機からパラシュートで脱出して着陸したアメリカ兵を負傷しているにもかかわらず、何時もやさしいおじさんが、まるで別人のようになっ

てその兵を殴ったこと。それがきっかけでいままで戦争について考えるようになったのは偉いと思いました。私は全くに近いくらい戦争のことや戦争の悲惨さについて知らないと思います。私の母も戦争中は幼くて祖母の背中に負かって、焼夷弾の中を走って逃げまわったそうですが、詳しくは記憶がないようで戦争の話はあまりしてくれません。でも小学生の時に担任の先生の勧めで「はだしのゲン」というマンガ本を読みました。まだはっきりとむごい絵のページは覚えています。川に腹が異常にふくれた人の死体がぞくぞくと流れていくのとか、川の中にいる人を助けようとして手を引いたら、腕の肉がもぎ取れて骨が見えるとか、死んだ母親の乳首に吸いつく赤ん坊など・・・です。その時はあまり真実とは思えなかったけれども、原爆図展を見てみると同じような場面がいくつか描かれているのでした。私は「水」という作品を見て、解説を読んで「ギョッ」としました。その様子が頭に浮かんで、寒気がしました。死体の山は、眼や口や鼻がなるべく見えないように積まれてあった。そして、焼き忘れられた山の中から、まだ目玉を動かして、じっと見ている女の人がありました。それともうじが入って、ただ目が動いているのでしょうか。と書いてあるのです。思わず自分の目を押さえてしまいました。一作を見るのに何分間も立ち止まってしまいました。一人一人の表情が違うからです。うめき声や叫び声が聞こえてくるようだったからです。ほとんどの作品が墨で描かれたようで、白、灰色、黒の残酷で暗い世界に、たまに驚くほどの真赤な色がはっきりと浮かび上がって、流れ出る血液を強調しているように思いました。」（青木）

「幽霊」大勢の人の顔が皆ゆがみ、そして、そのゆがんだ顔の上に焼けこげてちぢれた髪の毛がのっかっていました。この人達の目は一体どこを見つめているのでしょうか。この人達には未来があるのでしょうか。まだ、生きているのに。赤ん坊が死んでいました。まだこの世に出て来て間もない赤ん坊が。六千度の熱を持つ光に殺されてしまいました。猫が死んでいました。同じ大地で、同じ空気をすって、生きとしいける者なのに。私は、その時そこにて、哀れな幽霊達を見守ってあげる事は出来ませんでした。目をそらさずに、じっとその絵を見つめました。」（辻本）

「最初に見たのは幽霊でした。そこに書かれている人々は、本当に幽霊のように見えました。人々は行列になり、力の尽きているような顔で、行くあてもなくぞろぞろと歩いていました。私はこの時、今まで見たどのシーンよりも井伏鱒二の「黒い雨」を思い出していました。私がこの本を読んで想像していたのと似ていたからです。」（棚沢）

「青白く強い光、爆発、圧迫感、熱風—天にも地にも

人類がいまだかつて味わったこともない衝撃。次の瞬間に火がついた。めらめらと燃えあがり、広漠たる廃虚の静寂を破って、ごうごうと燃えていったのでありました。」原爆の図「火」の解説の一文である。ふすま約8枚程度に描かれた等身大の人間達は映画のシーンなどとは違った迫力を持っていて、それが絵だということも忘れて、近寄りたがたい雰囲気がありました。また、この絵は全体としての構図の他に各々がべつドラマを持っていて、細部にいたるまで驚くほど描きこまれていました。」（飯田）

「少年少女」では抱き合って死んでゆく姉妹の姿がありました。私にも四つ年上の姉がいます。もし、私達がこの時代に生きていたのなら、どうだったでしょうか。やはり、この絵の姉妹のようであったかも知れません。たくさん少年少女が死んでいきました。しかし、生き残った者が必ずしも幸せであるとは限らないのです。何十年もたった現在でも苦しみをもち続けている人だってたくさんいるのです。こんな風に考えてはいけないのかも知れないけれど考えざるをえません。いっそ、その時死んでしまったほうがらくだったのかも。「母子像」を見て、今までとは違った解説を見て、ショックでした。「親は子を捨て、子は親を捨て、夫は妻を、妻は夫を捨てて、逃げまどわなければなりません。それが本当の原爆の時の姿です。」今まで、きれいごとだけを考えてきたような気がしました。本当の原爆の姿というのは、私たちの想像をはるかに超えるものなのかも知れません。優しさや愛なんて、戦争中は存在しないものなのかも知れません。そうであれば、殺しあいなんてできるはずはありません。そんな中においても愛が残されていたのです。母と子の愛。現在でも一番強いのは、母と子の愛かもしれせん。「からす」朝鮮人と日本人は見分けるのが難しいのです。まして、屍となってしまえばもちろんのことでしょう。日本人は、それでもまだ朝鮮人を差別したそうです。朝鮮人の屍は、最後まで始末が出来なかったのです。こんな行為は、人間として恥じねばならないでしょう。新聞で丸木夫妻のこんな記事を読みました。「アメリカで巡回展をしたとき、手伝ってくれたあるアメリカ人にこう言われたと言う。『中国人の画家が、南京大虐殺の絵を持って日本を回ったら、日本人はどう思いますか。』と」私達は、自分が受けた広島傷はいつも忘れていません。しかし、自分達が南京の人々を傷つけてしまったことを忘れてはいないでしょうか。広島も南京もみな同じです。憎むべき行為です。尊い命の重さはすべて同じです。」（岡崎）

「絵の中の人は逃げていました。しかし、逃げて原爆が落とされる前の状態、気持ちには戻ることは出来ませんでした。大半の人が死に、生き残りの人は後に

なっても苦しみました。今でも苦しんでいる人々がいるなんて信じたくないことです。罪も全くない、ただそこにいたというそれだけの理由で死ななければならなかった人々は、原爆を落とした外国人を恨んだのか、戦争を意味なく長引かせてきた日本を恨んだのか、どちらだろう。それともそんなことはどうでもよくて、ただ戦争を憎んだのかも知れません。よくテレビや映画で『国のため』と言って戦争に行く場面がありますが、気が狂ってんのかおまえ! って叫びたくなります。国のためといって人を殺し、苦しめてただ偉い人の欲をみただけの手段に使われた戦争。『ピカは人がおとさにゃおちてこん。』この言葉を見た時、頭を叩かれたようにガクーンってなって涙が出そうになりました。あの絵の中で逃げさまよっていた人々は同じ人間によって苦しめられたのです。同じ人間なのです。(阿知波)

「水、水。人々は水を求めてさまよいました。燃える炎を逃れて、末期の水を求めて一傷ついた母と子は、川をつたって逃げました。乳をのませようとしてはじめて、わが子のこときれているのを知ったのです。」生と死の関係は逆になっていますが、母親の心から子を守る気持ちが、この『水』の絵の中の母親のなんとも言いがたき悲しそうな顔からわかります。そしてもう一つ。「母子像」(1959)では、『家の下敷きとなり、燃えさかる中を、親は子を捨て、子は親を捨て、夫は妻を、妻は夫を捨てて、逃げ惑わねばなりませんでした。」こんな窮極の時でも「不思議なことに母親が子供をしっかりと抱いて、母は死んでいるのに子供が生きているという、そんな姿をたくさん見ました。」というように、これから、人間の人間に対する優しさと悲惨さが同時にそこに存在しているのがわかります。野間さんのお話で、原爆の図展ではただ悲惨さだけが写實的に描かれているのではなく、絵一芸術にとってなくてはならない芸術性としての「人間に対する優しさ」も描かれているとっておられました。まさに、その通りでした。母と子に限らず、「少年・少女」(1951)にも心を打たれるものがあります。そこには数々の子供たちが見るも無残な姿で死んでいました。自分と同じ子供が、生きる喜びも味わわず、その美しい命の灯を罪もないのにむざむざと消されたのは、大きなショックでした。人間とは思えぬほどのひどい光景は、今の自分達からは想像もできません。彼等には「青春」等という人間として誰もが持つあたりまえの文字さえもないのです。そんななかに「変わり果てた姿で抱き合っている姉と妹」が生きていました。そこからは、先ほど記したように、「人間に対する優しさ」がにじみ出てくるようでした。どうか新しい未来に向かって生きて欲しいと願わずにはいられません。作品の中で一つドキッとしたものがあります。

それは「とうろう流し」(1959)です。一見、たくさんのとうろうが川を流れているだけの絵のように見えますが、そこには二つの『時』一言うまでもなく現在の戦後の平和な世と、原爆が落ちた時一が二重に描かれているのです。つまり、とうろうの絵の中に原爆が落ちて死んだ人やその時苦しんでいた人が隠されているのです。これは、何を意味しているのでしょうか。丸木さんは、何を訴えたかったのでしょうか。この「とうろう流し」は唯一のカラー作品です。つまり何か強調すべきことがあるのでしょうか。野間さんの話で一番野間さんの言いたかったことは、今の私たちの平和は「犠牲の上での平和の世」ということでした。こういうことから考えると、この「とうろう流し」に何故過去の世界が現在の世界と重なっているかといえば、丸木さんは、決して過去のことは忘れないで欲しいと言いたかったのではないのでしょうか。それは未来への希望、将来日本を担う我々への絶大なる期待が込められているのではないのでしょうか。原爆の恐ろしさは痛いほど我々は知っているはず。だから、我々は、地球を滅ぼさぬよう、いま何をしなければならないか考える必要があると思います。最後に一番心に残った言葉を書きたいと思います。「人間がおらなピカは落ちん。」結局戦争を起こす「人間」が一番恐ろしいのでしょうか。いや、そんなことはないはず。人間は本当は心優しい姿にもどることかできるのです。それが人間なのですから。(品川)

「最近の映画や、漫画などには戦争中の軍隊、戦闘の様子だけが劇的にまた、ロマンティックに描かれているものが多いと思います。そのような映画には、戦闘のまきそえになって死んでいった人々は殆ど登場せず、戦ってかっよく死んでいった人々しか描かれていないように思います。私は丸木さん夫妻の「原爆の図展」を見学して、今までまるで気にもとめなかった「まきそえになって死んでいった人々」の存在が、とても重く感じられてきました。なんだか、今まで時代の流れといっしょに半分かすんでしまっていたことを、急に近くで、しっかり見せられた時の気持ちのようです。そこに描かれている人々の表情は、皆とても悲しくて、悲惨なものでした。なぜか私は、今まで、戦争で死んでいった人々は「祖国万歳」と笑って死んでいったのだと思っていました。きっと、マンガや本などのロマンチックを表現を信じこんでしまっていたのだと思います。しかし、どの絵を見ても、平和で安らかな表情で死んでいる人なんていないのです。まるでその人々は私に「戦争にはロマンなどないんだよ。こんなに悲惨なものなんだよ。」いっているようでした。見学前の野間さんのお話しにも「火」の中の赤ちゃんに、いつも「おばちゃんは、私たちのために一体何を

やってくれているの」と問いかけられるという女性が出てきました。ほんとうにそうです。絵を順に見ていくと、だんだん「幽霊」「救出」「少年少女」「母子像」の中の人々が絵をぬけてきて「あなたは、いま何してるの?何のために生きてるの?」とか「私にも今の平和を頂戴。」とといかけられそうなのです。もし、本当にそう問われたら、私はどう答えればよいのでしょうか。きっと何も言えなかったと思います。今回の見学で、私は「今の平和はあの人達の大きな犠牲の上に成り立っている。」ということを確認させられました。」(日比野)

「今日講演を聞かせてもらって、地球上には一人あたり3～4tにもなる核爆弾があると聞き、想像を絶する莫大量に本当に驚くばかりでした。あるとは聞いていましたが、そんなにもおおくの量があると知り「もし間違っただけが爆発してしまったら人々の命はどうなってしまうだろう。」と想像すると恐ろしくてとても安心して生活することは出来ません。なぜ、そんな物が必要なのでしょう。経済摩擦、国際紛争、領土問題などの解決法として、どうしてもっと平和的なものがないのでしょうか。相手の身を滅ぼすことは自らの身を滅ぼすかもしれないということを戦争を起こす前の日本に気づいてほしかったと思います。」(伊藤)

「約40年前に広島に原爆が落ちて、広島市内が本当にあの絵のように恐ろしかったなんてなんだか信じられません。自分が生まれるたった25年前のことだったなんて・・。私は3才位から小学校の3年生まで広島に住んでいたの、平和公園には何度も行ったことがあります。本当にきれいな公園で、日曜日などは、たくさんの方が来ます。あの公園が爆心地だったなんてとても考えられません。絵の一つに「水」という題名のもがありました。私が小さい頃よく遊びに行った太田川もきっとあの絵のように死体の山だったんだ、と思いました。「少年少女」という題がつけられた絵がありました。自分達と同じ年の人達の絵で、見ていて恐ろしくなりました。一番心に残っている絵の一つです。」(宮沢)

#### 4. 『現代社会』に位置づけた『原爆の図展』鑑賞の評価と生徒の平和認識

『現代社会』の教科書の中にも原爆の記述はある。<sup>\*①</sup>  
「はだしのゲン」の映画・漫画等を見た生徒も多い。生徒の感想文にもあった井伏鱒二の「黒い雨」も視野に入っていた。本校では2年に研究旅行を実施して、その中で例年広島原爆資料館を訪れることが予定されている。<sup>\*②</sup>それにさらに屋上屋を重ねて原爆の悲惨さを「絵」で示すことがどれだけ意味のあることなのか、多少の危惧があったことも確かである。しかし、上記の文にもあったように現在の生徒達の見ている映画や

漫画の戦争についての描き方は、かなり戦争美化、ないしロマンに陥っているものが多い。また小説や物語で訴えようとしても戦後40年の、しかも「平和」を満喫している世代の感覚からは遙かに遠い時代のお話としてしか写っていない。風化した戦争認識が支配的である。もし現在日本だけが安穏として平和に日常を送り、現実の世界情勢の中で刻々と戦争による破滅の時が迫っているとしたら、一つには客観的に現実の分析が出来る力を養うとともに、また一方でその風化した感性を喚び起こす必要にも迫られている。

鑑賞前に「私は原爆展など見るのは嫌いですから止めていけませんか」と言ってきた女子がいた。「被害者づらして原爆・原爆と言っている人が嫌なのです。」ともいう。南京大虐殺は日本は加害者だった。そう彼女は言いたかったのである。丸木夫妻の書かれた水彩画のなかに沖縄戦における日本軍の島民虐殺の図があった。広島で朝鮮の人々だけが屍を片付けられなかったという絵もあった。ただ広島・広島と叫んで見るのが平和教育ではない。原爆反対と言っているだけでは戦争を知らない世代の耳には他の雑音と同じにしか受け止められない。「きれいな水爆」などというものは存在しない。それほどに今の高校生達は非政治的なのである。

今までの平和教育が空回りしていたのは、そうした戦争を知らない世代の非政治的平和感覚に対してあまりにもイデオロギー的であり過ぎたのではなかったか。もちろん、全くノン政治的取扱いでただ事実だけを並べ立てても社会認識には成り得ない。大事なことは今のノン政治感覚で平和を満喫する戦争の恐ろしさを知らない世代に対して、今ほど戦争の危機をはらんでいる時代は他にはないということをも身を持って感じさせることである。世界の現実を知らせることである。

『現代社会』の中で何を教えるのかと言ったら、そうした現実を知らせるとともに、その現実の恐ろしさを感じさせる「目」を持たせることである。その観点から今回の『原爆の図』展の鑑賞行事を取り上げてみると、それなりの効果をおさめたのではないかと思う。

付言するならば事前にオリエンテーションとして講演願った野間さんのお話しは予想以上に生徒達に深い感銘を与えている。話のうまさもあるが、先輩として野間さんを見ている生徒の構えも見逃せない。場面の設定も良かったと思う。

\*①『現代社会』教育出版 P94 には広島への原爆投下の写真とともに 峠三吉『原爆詩集』そして「核兵器の完全禁止を求めて」「高校生のヒロシマ・アピール」が載っている。

\*②総合学習としての研究旅行 『名古屋大学教育学部附属中・高等学校研究紀要』29巻